

第2部 2等賞

アイアン・ドリーム

埼玉県越谷市

比留間 幸子

デパートの地下の食料品売り場はありがたい。

外食に飽きて、かといって仕事帰りに一人分の材料を買って自炊する気力もないときは強い味方になってくれる。

その日も夕食と、翌日のお弁当のおかずを調達すると、バーゲンのお知らせポスターを横目でチェックしながら駐車場に戻った。

ドアを開けるとシートの上に、キーホルダーのようなものがある。

つまみ上げると、それは鉄腕アトムの人形だった。

どうして、とあたりを見回してすぐに、運転席側の窓が数センチあいていることに気がついた。おそらく誰かが隙間からいたずらしたのだろう。

気をつけなければと思いつつ、無意識にアトム人形を助手席に置いて駐車場を出た。

三つ目の交差点で信号待ちをしていると、前の車の後の窓からにゅっと伸びた手が、歩道のゴミ箱に向かって空き缶を放り投げた。

空き缶はゴミ箱のへりにぶつかって跳ね返り、ゴロゴロ転がって私の車の下に入った。

「野蛮人！」

思わずそう叫んだ私に答えるかのように、誰もいないはずの助手席から「まったくだね」という子供の声が聞こえた。

えっ、と思って横を見ると、さっきまでほんの五センチ程度だったアトムの人形がいつの間にか大きくなって、ニコニコしながらこちらを見ている。

「21世紀には空き缶は全てリサイクルされるからね。あんなことする人いないよ」

あんどりと口をあけたままの私に、

「お姉さん、信号青だよ」と、アニメの鉄腕アトムそのままの彼がいった。

「びっくりするのも無理ないね。じつはボク、50年後の未来から過去を見物しにやってきたんだ。しばらく、つきあってくれる？」

「か、構わないけど、どうすればいいの？」

なんとか気を取り直して、とりあえず車を走らせながらそう尋ねると、彼は成田空港へ行きたいという。

きっと、これも何かの縁だろう。

私は未来からの使者を乗せ、空港へと向かうことにした。

鉄とリサイクル

それにしても、鉄腕アトムが本物になる21世紀は、どんな時代なのか。戦後の50年でこれほど社会が変わったのだから、きっとすっかり様変わりしているに違いない。

未来の生活に興味津々の私に、アトム君は「本当はあんまり喋っちゃいけないんだけど」といいながら、嬉しそうに話してくれた。

彼によれば、21世紀はとにかく物が大切にされて『リサイクル』がキーワードの時代になるという。政治も経済も20世紀とは大違いで、省エネやリサイクル計画を抜きにしては誰も相手にしてくれない。アトム君の言葉を借りれば「それだけ文化的で知的な社会」になるそうだ。

「たとえば、さっきの空き缶だけど。車から放り投げる人がいるなんて社会全体の文化レベルが低い証拠だよ。21世紀の人は、資源の大切さをしっかり理解してるから、貴重な空き缶をむやみに捨てたりしない。みんなスチール缶とアルミ缶をきちんと分けて、ちゃんと『リサイクル箱』に入れてるよ」「偉そうな言い方ね」

私が冷やかすとアトム君は、

「だって、ボクの体もそのおかげでできたんだもの。スチール缶のスチールは、ようするに鉄だよ。鉄はもともとスクラップとしてリサイクルされていたけど、それがもっとずっと簡単にできるようになって、空き缶一つもムダにされなくなるんだよ」

と心持ち顔を赤らめ、ムキになって答える。

「捨てられていた鉄の再利用が本格化するでしょう。そうすると鉄は安く大量に出回って、どんどん身近なところで使われるようになる。同時に研究もぐんぐん進んで、鉄の優秀さがますますわかって、リサイクル文化の花形になっていくというわけさ」

「ふーん」

「19世紀の初めに、化学者フルクロアは『鉄は文明の尺度』といったけど、その通りだと思うな。文明の進んだ21世紀には、鉄を使ったまったく新しい素材も開発されて……ね、このボクの体、ぜんぜん冷たくないでしょう」

アトム君はハンドルを握る私の左手に軽く触れた。

彼の手はほんわかして冷たい鉄のイメージとはほど遠かった。気のせい、か、軟らかくさえ感じる。

「たしかに、とても鉄の腕とは思えないわね」

「50年後の“鉄腕アトム”は新素材、『ライブ・アイアン』でできてるってこと。鉄に保温性と弾力性が加わって、触った感じを自由に調節できるんだ。人型のボクの体は、人体に近い感触に設計されているんだよ」

20世紀のリサイクルといえば、古新聞・古雑誌からトイレットペーパーを作るイメージだろうか。それが、21世紀にはジュースの空き缶から人肌の鉄腕アトムが生まれるとは……

そんな素晴らしいリサイクルなら、20世紀の私たちだって空き缶のポイ捨てなどしないだろう。

鉄と人体

そのうちどこかで高速道路に乗ろうと考えながら、なんとなく車を走らせているうちに道に迷ってしまった。夕闇に浮かぶ東京タワーを前にして、芝公園の入り口がわからない。

とりあえず車を止めて地図を広げると、アトム君が不思議そうに「どうして地図を見るのに思いっきり首を曲げるの」と聞いた。

それは肩こり症の私の無意識のクセだった。

数年前、鉄アレイで肩叩きしているのを目撃されて以来、会社では“鉄の女”と呼ばれている。

そんな話をする、アトム君は自分の胸をパカッと開き、中から綺麗なピンク色の鉄アレイを取り出した。

「電動式『オート鉄アレイ』だよ。なんでこんなのができたのかと思ってたけど、きっと、お姉さんみたいな人たちの要望で生まれたんだね。使ってみて」

「未来の肩叩き？」

「スイッチを入れると振動して自動的にマッサージ機になるんだ。硬さも調節できるし、さびないからお風呂でも使えるよ」

さっそく渡された鉄アレイを肩にあて、スイッチを入れた。心地好い振動が伝わってくる。

「うーん、トレーニング用の鉄アレイとマッサージ機をくっつけるなんてアイデアね。これだけ人の体にやさしい鉄が作れるなんて、21世紀はなかなか素敵な時代だわ」

「とにかく鉄製品の発展は目覚ましいよ。鉄は資源としてリサイクルが簡単だというだけでなく、たとえば酸化鉄なんかは自然にかえるからね。公害にならない、環境を汚さないという長所もあるんだ。さらに、鉄からエネルギーをとりだす研究も進んでるよ」

「エネルギー？」

半分目を閉じてオート鉄アレイに肩をまかせたまま尋ねると、アトム君はまたしてもびっくりするような話しをはじめた。

「そもそも、発電機そのものも鉄がなければ作れないからね。20世紀にも、電気エネルギーをつくるには鉄が大活躍してたんだよ。それが21世紀になると、別の角度からも鉄エネルギーの利用が始まるんだ。お姉さん、“鉄細菌”て知ってる？」

「知らない」

「自然界には鉄を食べて生活のエネルギーを調達する、鉄細

菌という連中がいるんだよ。その細菌を利用してエネルギーを取り出そうというのが『バイオ・アイアン・エネルギー計画』さ」

“たで喰う虫も好き好き”とはいうけれど、本当に鉄を食べる細菌などいるのだろうか。

半信半疑の私にアトム君は、「生き物の体と鉄は、本当はともに関係が深い」ということを、こんこんと説明してくれた。

じつはタンパク質や脂肪などの他に、生物の体には少量でもどうしても必要な元素がある。その中で鉄は一番重要な元素で、「人間の体も鉄がなければ存在しない」とまで言いきれるそうだ。

なにしろ血液の主成分であるヘモグロビンは、その分子の中心にがっちりと鉄の原子をはめこんでいて、それがなければ人間は体内に酸素を運ばずに死んでしまうという。

そういえば「鉄欠乏性貧血」という名前を聞いたことがあるなあと考えていると、アトム君は胸の奥から一握りのキャンディを取り出し、私に差し出した。

「21世紀の女性が愛用してる『アイアン・キャンディ』だよ。貧血予防の健康食品として爆発的ヒットを飛ばしてるんだ。20世紀に使われていた貧血の薬より品質も味も改良されて、ずっと効果が大きいよ」

「たしかに、人間も鉄を“食べる”となれば、鉄を食べる細菌がいたっておかしくないわね」

私はもらったキャンディを一つ口に入れ、車のエンジンをかけた。

鉄と都市

ほどなく芝公園の入り口は見つかった。高速に乗ってしまえば、あとは湾岸道路に出てひたすら東へ走ればいい。

左手にレインボーブリッジが見えてきた。助手席のアトムに「きれいでしょう」と自慢すると、「50年後もあるよ」の返事。

「私ね、ここの夜景大好きなの。アトムの時代もこんな感じ？」

「東京タワーのある側はあんまり変わらないけど、海側の景色は全然違っちゃう。いまはポツンポツンとしか灯りがないけど、タワーの方が淋しく見えるほどビルが並んでキラキラして……“1億ドルの夜景”と呼ばれるよ」

あんまり金きら金になるのも考えものだと思っていると、アトムは「未来の夜景、見たい？」といって、小さなビデオテープを取り出した。

私は首を横に振った。

「やめとくわ。長生きしてナマで見るから」

「残念だな。夜景はともかく、このテープの性能を見て欲しかったんだけど……これ、20世紀のカセットテープ並みのサイズでしょ。これですととても高画質なんだよ。じつはね、これもやっぱり鉄のおかげなんだ」

録画テープは磁性体の鉄でできている。

21世紀には鉄の性能がミクロのレベルでも向上し、磁性記録メディアとしての録画テープもどんどん小型・軽量・高性能化していくという。

さらに、鉄の磁性体としての性質を使って指紋を読み取る『フィンガーセンサー』も開発され、家庭や自動車の鍵に併用されるようになる。

聞けば聞くほど未来の暮らしは鉄のお世話になるようだ。

そういえば、今走らせているこの車も、後ろを走るトラックもバスも、塗装した鉄のかたまりだ。

鉄道だって、線路も電車も鉄である。

東京タワーも、レインボーブリッジも、高層ビルも……考えてみれば、この街を特徴づける建造物はすべて頑丈な鉄を骨をもった、巨大な鉄のかたまりだ。

東京から鉄を取り去ってしまったら、きっと何も残らない。私の生まれ育った東京は、鉄とともに大きく成長したのか……

ふっと、助手席のアトムを見た。未来からきた彼は、もう単なる冷たい鉄のかたまりではない。人肌の感触をもった温かい鉄だ。

21世紀の人々は、鉄に木材と同じ生きた優しさを与えようとしているのかも知れない。

もっと身近で、もっと親しみのもてる鉄に囲まれた社会がやってくる……

「お姉さん、危ないよ」

アトムに脇見運転を注意され、あわててハンドルを握り直した。

「車もね、21世紀にはアルミニウム並みの『超軽量鉄』が開発されて、ごく軽いボディが普通になるよ。もちろん強度や安全性は保証つき。それでいて燃費が向上するんだから、いいことづくめだね」

「燃費がいいってことは、それだけエネルギー資源の節約にもなるってことね」

ガソリンをがぶ飲みしない未来の軽やかな車。やはりボディは流線形だろうか……

「アトムに話そうかな」

「なあに？」

「ずうっと感じてて、誰にもいえなかったこと」

鉄と地球

小学生のとき、遠足で山へ行行った。

新鮮な空気に満ちた緑の木立の中で一日を過ごし、バスに揺られて灰色の空の都会へ帰って来る。校庭で点呼を取り、解散。友達と別れて家路を急ぐ私は、車がビュンビュン飛び交う立体交差点の前に立ったとき、「ああ帰ってきた」と心の底からほっとした。それは交差点の向こうに家があ

る、あと少しで帰れるという安心感だった。

大学生になって、友達と富士山へドライブに出かけた。

帰り道、中央高速を抜け、高井戸から都心へ向かう首都高速で、助手席の窓からうす紫に暮れてゆく景色をぼんやりと眺めていた。

やがて、ゆるやかなカーブの先に新宿の高層ビル群が見えたとき、「帰ってきた」「ここが私の居場所だ」という、子供のころ遠足の帰りに感じたのとまったく同じ安心感が強烈にわきおこった。

私は困惑した。

数時間前、富士の自然を満喫していたそのときよりも、はるかに安心できて落ちつくこの感じは、一体なんだろう？ 大自然の対局にあるような圧倒的な高さでそびえたつ鉄筋コンクリートの街並みに、懐かしいまでの温かさを感じるとは……

「どうしてそうなのかわからないけど、とにかく私は鉄のかたまりみたいな人工の建造物に、山や木や草に感じる以上の親しみを感じるのよねえ」

アトムは黙って聞いている。

「横浜のベイブリッジを初めて見たときも、こんなのつくっちゃう人間てスゴイなって、そう思ったらドキドキしたわ。でも自然保護の立場もよくわかるの。私だって、開発の名のもとに片端から自然を壊すのはよくないと思う。だから高層ビルを見ると落ちつくなんて変な話し、誰にも言えなかったの」

「ちっとも変じゃないよ」

アトムが真剣な声でいう。

「開発がすべて悪じゃないし、鉄のかたまりに親しみを覚えたって、ちっとも変じゃないよ。鉄はもともと地球の一部なんだから。鉄は地球に生き物が生まれるずっと前から地球にあった、自然界の一部なんだよ」

「……？」

「ボクらは地球の表面を覆う地殻の上に住んでいるけど、地殻の成分の中で、鉄は酸素、ケイ素、アルミニウムの次にたくさん含まれている元素なんだ。それに、地面に穴をあけてどんどん掘り進んだら、やがて鉄のかたまりにぶつかるよ。地球の中心部は鉄のコアでできているんだから」

「地球が鉄でできている……」

「人間は地球がくれた《鉄》という素晴らしい素材を、五千年以上の時間をかけていろいろな角度から研究し、便利で使いやすいものに変えてきたんだよ」

それは木彫りの人形をつくるより遥かに遠く長い道のりだったかも知れない。でも、だからといって鉄の人形がそれほど自然とかけ離れているわけじゃない。

酸化鉄は自然にかえるし、鉄を食べる細菌もいる。鉄のリサイクルがうまくいくのも鉄が自然のサイクルにうまく

馴染んでいるからだ。21世紀の人々は、開発と自然保護の矛盾を乗り越え、見事に鉄と自然を調和させる。

「そのときがくれば、お姉さんも鉄のかたまりを見て落ちつく自分に、引け目を感じなくなると思うよ」

鉄と宇宙

空港はすぐそばに迫っていた。高速道路の彼方に、ジェット機の赤いランプの点滅が見える。

私は胸が熱くなるような思いで、アトムにいった。

「あたり前みたいに飛んでいるけど、空に憧れた多くの人々の夢の結晶が、あのジェット機なのね。鉄と付き合いはじめて数千年で、人間は足元の重たい鉄を空に浮かべてしまったのね」

「鉄はもともと宇宙^{そら}からきたものだしね」

「空って？」

「宇宙だよ。今から46億年前、宇宙に浮かんだたくさんの巨大隕石が合体して、地球は生まれたんだ。隕石の中には鉄を含むものもたくさんあって、それが地球の一部になったんだよ。そのときの鉄を掘り起こして、今の人間が使っているというわけさ」

「鉄の故郷が宇宙だなんて……」

「鉄だけじゃないよ。地球上のすべての物の故郷が宇宙なんだ」

「すべてって、人間も？」

「人間の体をつくっている原子の故郷、という意味だね」

宇宙には初め、一番軽い水素と二番目に軽いヘリウムの原子しかなかった。

やがて無数の水素原子が集って、太陽のように自ら燃える星が生まれると、その内部で原子の核融合反応がはじまり、炭素や酸素など、さまざまな原子が誕生した。

「星の原子炉がなかったら、水素とヘリウムより重い原子はどこにもなくて、人間もいなかったというわけさ。その星の原子炉の中で、一番最後にできるのが最も安定な金属、鉄なんだよ」

アトムはいう。だから人体の故郷も宇宙。鉄の故郷も宇宙だ。

宇宙のすべての物質は星の原子炉と、ときに原子炉が燃えつきたあとで起こる超新星爆発によって生まれた原子でできている。

つまり地上のあらゆる物質は、海も山も人も鉄も、地球が生まれるずっと前に爆発した、星のかけらでできている……

「鉄と人間が同郷だったなんて、妙な感じだわ」

私の嘆息に、アトムは笑いながらいった。

「でも人は昔から、無意識に鉄との接点に気づいてたんじゃないのかな。だからこそ、人は鉄といっしょに故郷の宇宙を目指してるんだと思うよ。ボクは今からそれを確かめに行きたいんだ」

鉄と未来

空港に着くと、アトムは再びキーホルダーのサイズに戻り、目立たないように私の手の中におさまった。私は彼の望み通り、ヒューストンへ向かう荷物の一つに彼をくくりつけた。

アトムは小さく「ありがとう」といって手を振ると、すっかり固まってしまった。もうどこから見てもただの鉄の人形だ。

車に戻り、ぼうつとした気分で走り出す。彼の最後の言葉が頭の中にこだまする。

『21世紀は宇宙旅行も普通の時代になるけれど、宇宙船をつくるのも、スペースコロニーをつくるのも鉄だよ。すでに20世紀の人たちも、鉄を人工衛星の形で地球のまわりに飛ばしてるけど、未来にはそれがもっともっと大がかりになっていくわけさ。』

お姉さんたちの時代は、いろいろな点で過渡期なんだと思うよ。開発と自然保護の問題、宇宙公害の問題、そういった現実もある一方で、やっぱり新しいビルを建て、スペースシャトルを飛ばすのはどうしてかな。

きっと、人は神話の時代から夜空の星に憧れて、いつも星を目指していたんだよ。意識の底で故郷の宇宙としっかりつながっているから、人は宇宙へ旅立たないではいられない。

そのときは鉄といっしょなんだ。人間は鉄の可能性を無限大にまで引き出して、手を取りあって夢を見るんだ……』

私は自分の部屋に帰ってからも、まだふわふわと夢見心地だった。

台所に立てば、未来のキッチンの色つきのステンレスで、もっと華やかになっているだろうとか、電気製品も軽量鉄のおかげで軽く扱いやすくなっているだろうとか、いろいろなことが浮かんでくる。

そういえば、この前見た新型洗濯機の広告によれば、鉄の進歩で雑音が減り、静かになったとか。脱水槽には高速回転のできる高性能のステンレスが使われて水切れがアップし、洗濯物が早く乾くという。

鉄の進歩は身近なところでどんどん進んでいるのだとあらためて思う。

食事を終え、お風呂に入った。

湯ぶねにつかり、アトムにもらったオート鉄アレイを首すじにあてる。

いい気分で、ゆったりと手足を伸ばしてまた考えた。

これが21世紀なら……

人肌のステンレスの湯ぶねがスイッチ一つで、全身を気持ちよくマッサージしてくれるだろう。

夢かなあ……

(東京都立上野高等学校教諭)